

氏名	DMITRIEVA ELENA VLADIMIROVNA	
授与した学位	博士	
専攻分野の名称	文化科学	
学位授与番号	博甲第 5763 号	
学位授与の日付	平成 30 年 3 月 23 日	
学位授与の要件	社会文化科学研究科 社会文化学専攻 (学位規則 4 条第 1 項該当)	
学位論文題目	「満洲国」と「白系ロシア人」社会 ——教育政策、技術者育成政策に見る「五族協和」の実態——	
学位論文審査委員	教授 松本 俊郎	准教授 渡邊 佳成
	准教授 吉田 浩	教授 尾関 学
	大阪大学名誉教授 生田 美智子	

学位論文内容の要旨

【1】ドミトリエヴァ氏の学位請求論文は、「満洲国」に居住する白系ロシア人が、「満洲国」の民族政策の下でどのように生きていたかを教育問題に焦点をあてて検証する。「満洲国」は「五族協和」（日、漢、朝、満、蒙）の理念を掲げて中国東北に住む諸民族に対する同化政策を推し進めたが、1930年代後半になると白系ロシア人に対しても国民としての統合をはかるために統制を強化した。ソヴィエト連邦が崩壊し帝政ロシアが復活するという希望がしだいに薄らぎ、民族社会の前途に対する不安が高まる中で、多くの白系ロシア人は「満洲国」にとどまりながら、こうした統制強化の動きに対応した。日本、ロシア、中国の先行研究は、この過程を「満洲国」による白系ロシア人の奴隷化と捉えてきたが、ドミトリエヴァ氏はそうした側面だけでなく、白系ロシア人の「満洲国」に対するしたたかな抵抗と、それに規定されてジグザクすることになった統制強化策の展開を重視する。具体的な課題は、以下の3点である。

- (1) 白系ロシア人学校の体制と教育内容が、1937年に導入された「満洲国」の「新学制」によってどのように変化したのか。
- (2) 「新学制」の導入に対するロシア人社会の抵抗はどのようなものであり、それによって「満洲国」の教育行政はどのような影響を受けたのか。
- (3) 白系ロシア人を対象とする職業教育の再編と白系ロシア人社会、関東軍、満洲国政府の関わりはどのようなものだったのか。

【2】第1章（満洲国における白系ロシア人の位置づけ——東洋人と西洋人の共存共栄・民族協和社会の実態——）では、中国東北における白系ロシア人の歴史と人口が明らかにされ、他の都市を圧倒して人口が集中していたハルビンの特異性と、「満洲国」・関東軍が白系ロシア人を掌握するためにハルビンに設置した白系露人事務局についての解説が用意される。中国東北の白系ロシア人に関わる基本的な知識が整理され、第2章からの分析の導入となっている。

第2章（「新学制」導入前の白系ロシア人教育の実態（1933年～37年）——満洲国における旧帝政ロシアの教育制度の存続——）では、①ハルビンの白系ロシア人学校が採用していた学年歴、授業科目、ロシア正教による宗教教育、旧帝政ロシアの教育制度から継承した教科書、②1935年から削減された「満洲国」からの補助金、増額を企図した白系露人事務局の請願活動の失敗、③「新学制」の導入を契機に白系ロシア人社会に対して押しつけられた職業学校、高等教育の廃校、という3点から明らかにされる。①、③については先行研究である島田道彌（1935）、内田ヴァルーエフ「哈爾浜のロシア人学校——初等・中等教育編——」（1999）、Потапова[ポタポワ]（2010）、中嶋毅（2006,2010）等の紹介と新たに発掘した白系露人事務局資料や「満洲国」の『民生部調査月報』、ロシア字新聞等による実証事実の補強が、②については上記の発掘資料によって可能になった新事実の発見と検証が示される。

第3章（「新学制」導入と白系ロシア人教育（1936～45年）——満洲国の教育政策——）では、新制度の導入が白系ロシア人学校に与えた影響が検討される。「満洲国」が行った「新学制」については、同化政策、奴隷化政策とする評価が定着している。しかし、白系ロシア人学校の実態に立ち入ってこれを検証した先行研究は存在しない。第5章とともにドミトリエヴァ論文の核となっている本章の内容については、「審査結果の要旨」の中で触れることにする。

第4章（「新学制」実施産物の建国大学における白系ロシア人——日本語の環境における五族協和の実践場所——）では、建国大学が取り上げられる。建国大学を取り上げた先行研究は多いが、白系ロシア人社会との関わりについては掘り下げられていない。ドミトリエヴァ論文は、募集方法、第1次試験、第2次試験、合格者、志望動機、学生生活、ロシア語による対応の不備、卒業後の進路と後世になってからの回想内容を白系ロシア人との関わりで先駆的に明らかにした。建国大学がコザック人を優先して採用していた事実は、関東軍とコザック人との特別な関係を示唆しており、興味深い。建国大学の存在は、一部の白系ロシア人にとって個人的な栄達の道となっていたが、白系ロシア人社会の改善につながるものではなかったとされる。

第5章（「新学制」実施産物の技術者養成機関と白系ロシア人——ロシア語による技術教育——）では、北満学院と哈爾浜鉦工技術工養成所が取り上げられる。北満学院については中嶋毅（2006）が沿革を明らかにしている。ドミトリエヴァ論文では日本語教育の水準や運営資金の枯渇状況、開講時間帯と勤労青年の不適合といった問題に対する白系ロシア人学生の不満が、発掘した白系露人事務局関連資料に依拠して検証されている。哈爾浜鉦工技術工養成所に関わる検証は、さらに多くの発見事実を提示している。同訓練所は設立当初には白系ロシア人の間で高い人気を得ていたが、やがて応募者は減少し、学校運営の課題も中国人技術者の養成へと変化した。ドミトリエヴァ論文は、高い人気をもたらしていた実習の内容とそれを可能にして

いた^{むーりん}穆稜炭鉱株式会社との関わり、そして人気の急落を招いた教育内容の日本化と学生生活の実態を明らかにする。

終章では、序章で提起された3つの基本課題に即して、①白系ロシア人学校は「新学制」の導入後、財政的な締め付けを受けながら、ロシア正教色の払拭、ロシア語やロシア文化に関する教育の放棄、さらには職業学校、高等教育機関の廃校を強いられた、②宗教的、倫理的あるいは経済的な理由から白系ロシア人社会は「満洲国」当局が推し進めた白系ロシア人学校の再編に対して粘り強く抵抗していた、③哈爾濱鉱工技術工養成所は、「満洲国」、関東軍、白系ロシア人資本家の利害、すなわち技術者不足の解消と白系ロシア人社会の安定化を迫られていた「満洲国」と関東軍、そして関東軍との強い絆を持ち、ロシア人技術者の確保を望んでいた白系ロシア人資本家の利害が一致したことにより、ロシア語を多用するロシア式の研修期間として新設され、白系ロシア人青年の間でも人気が高まった。しかし、前二者と白系ロシア人資本家の利害はしだいで対立し、養成所の運営はロシア式から日本式へと転換を強いられ、白系ロシア人社会との繋がりも希薄化した。こうした検討結果を踏まえてドミトリエヴァ論文は、「五族協和」をうたう民族政策は白系ロシア人から協力を引き出すために朝令暮改を繰り返したが、白系ロシア人社会に楽土の国をもたらすものではなかったと結論づけている。

【参考文献】

島田道彌（1935）．『満洲国教育史』、文教社、1935年．

中嶋毅（2006）．「満洲国北満学院の歴史 1938—1945年」（『ロシア史研究』Vol.79）、2006年

——（2010）．「満洲国白系露人事務局——1934～35年」（『ロシアと日本』）、成文社、2010年．

Потапова И. В. (2010). Потапова И. В. Русская система образования в Маньчжурии. 1898-1945 гг. Хабаровск, 2010.

学位論文審査結果の要旨

【1】ドミトリエヴァ・エレナ氏の学位請求論文は、全国学会での発表4回、地方学会での発表4回、ロシアでの学会発表2回、活字論文6本（査読付3本）、和文露訳1本、露文和訳1本の成果をまとめたものである。

審査委員は松本俊郎教授（主査）、吉田浩准教授、渡邊佳成准教授、尾関学教授と生田美智子大阪大学名誉教授の5名である。審査会は2018年2月15日（木）に第1共同研究室で開催された（14:00～15:40）。審査会ではドミトリエヴァ氏から論文の特長と予備論文審査会での指摘を受けて改善した内容について説明を受けた後で質疑応答に移り、予定時間を超過する口頭審査が行われた。

【2】ドミトリエヴァ論文には、①資料の発掘、②1930年代後半の白系ロシア人学校の実態検

証、③1930年代後半以降の白系ロシア人社会に対する評価の見直し、という3点で学術的な貢献がある。また④1930年代前半の白系ロシア人学校や、研究蓄積のある北満学院や建国大学に関しても、新資料の活用によって先行研究の成果を補強する検証がなされている。

①については、特に、(i)日本国内の一次資料へのアプローチ（国立国会図書館所蔵『民生部調査月報』、外務省外交文書館所蔵『外国学校関係雑件資料』、東洋文庫所蔵『建国大学卒業生回顧資料』等々）、(ii)在ロシア・ロシア語資料の発掘と分析（国立ハバロフスク地方文書館所蔵『白系露人事務局関係資料』、『ロシア語版教科書』、ロシア国立軍事文書館所蔵『在満白系ロシア人資料』、ロシア連邦国立文書館所蔵『在満白系ロシア人資料』等々）、(iii)スカイプを活用して行った生存者を対象とする聞き取り調査の結果、が高く評価された。

②については、「新学制」の導入に対する白系ロシア人学校の対応や「新学制」の導入後における哈爾濱鉦工技術工養成所の新設と衰退について先駆的に資料を発掘して検証を行い、新たな論点を提起したことが評価された。

新たな論点、すなわち③に関わっては、「満洲国」当局・関東軍に対する抵抗の失敗やソビエト連邦に対する否定的な態度が影響して関心を払われることがなく、検討が遅れてきた中国東北の白系ロシア人の動向を、白系ロシア人学校や白系露人事務局が行った神学教育の維持活動や（第3章）、^{むろりん}穆稜炭鉦株式会社を経営する白系ロシア人資本家が実現した哈爾濱鉦工技術工養成所の新設と運営内容の推移（第5章）といった問題から検証し、白系ロシア人を、犠牲を強いられながらも努力を続けたロシア文化の擁護者、「満洲国」や関東軍に対する抵抗者として積極的に評価した点が先駆的であるとされた。

また、日本とロシアの両国で回数を重ねてきた学会での発表や、雑誌論文への投稿に関する積極的な取組についても、高く評価された。

④については白系ロシア人学校（第2章）や建国大学（第4章）の中で多くの新事実が明らかにされたが、「論文内容の要旨」の中で触れているので、ここでは省略する。

【3】審査員からは、各章の完成度にばらつきがあり、一部の章については日本語の表現について改善をはかった方がよい、参考文献の表記方法に不備がある、アジア地域と欧米地域の間にあった白系ロシア人と地域社会とのかかわり方の違いについて視野を広げて考察してはどうか、総じて、英語圏の学術成果を取り込むという点で改善の余地がある、といった指摘がなされた。また、終章をはじめ、各章の記述については、新たに発掘した資料の特徴や入手方法、当該資料を分析することによって得られた知見、あるいは先行研究の成果を深めた点について、さらに明示的に示すための工夫があつてよいとする助言も出された。このようにドミトリエヴァ論文には改善すべき余地が残されている。しかしながら、既に説明したように、論文の内容が持っている学術的な貢献とそれを完成させるまでに申請者が費やしてきた多大な労力には大きな価値がある。

以上のような審議を経て、審査委員会はドミトリエヴァ氏の学位請求論文が貴重な学術的な価値を有していると認め、ドミトリエヴァ論文を博士論文として合格とする結論を全員一致で

下した。